

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

平成29年度もよろしくお願いします。

4月1日に行われた、平成29年度第1回代表者会議をもって平成29年度がスタートしました。続く北ライオンズ杯も、変則的な日程、予備日を使用しての6年生の部2日目、閉会式となりましたが、皆様のご協力により、滞りなく幕を閉じることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

また、やっと「エンジョイサッカー」のチラシを各幼稚園・保育園に配布できることとなり、未就学児にサッカーを楽しんでもらい、4種委員会のクラブの存在を知っていただく「エンジョイサッカー構想」がスタートできる運びとなりました。賛同いただいたクラブの皆様には大変お待たせしてしまい恐縮に存じますが、これからが肝心です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今日は友人と話していた時に話題となったことを皆様にも考えていただこうと思います。

その友人は私より15歳位若い方ですが、サッカーのプレー歴、指導者歴は長く、現在も自分でもサッカーを楽しみ、様々な小学生や中学生対象のクラブで指導もされている方です。ここ5、6年ほどのお付き合いですが、私が少なからず影響を受けている一人です。

今回、話題となったのは**少年サッカー指導者が育てているのは「選手」なのか「プレーヤー」なのか**ということでした。

「選手」の意味を調べると「競技会・試合などに選ばれて出場する人」とあります。また「プレーヤー」とは正に「プレーする人＝競技者」ということです。私たちが育てるべきは「選ばれて出場する人」ではなく「プレーする人」だろうというのが友人の主張でした。「プレーする人」を育てるのだから、試合に出られない子がいるのはおかしい、それでは「プレーする人」を育てていることにはならない。今の少年サッカー指導者は「プレーする人」を育てる前に「選ばれて出場する人」を育てることばかり考えていると言うのです。

皆さんはどうお考えですか。

サッカーはレギュラーの数が8あるいは11と決まっていますから、子ども達はレギュラーに選ばれるように頑張って練習します。結果として、競技会・試合などに選ばれず出場できなくても、頑張って練習したことでサッカーをプレーする人を育てているという考えも成り立ちます。

一方、サッカーの楽しさはゲームにある。そもそもスポーツは楽しむためにあるのだから、「プレーする人」を育てるには、楽しくゲームができる環境を大人が整えるべきという考えももちろん成り立ちます。

そして、日本のスポーツの指導の歴史を考えると、私の狭い経験で恐縮ですが、前者の考え方が中心で少しずつ後者の考えが受け入れられてきたように思います。

日本は〇〇道という考え方が根強く、その道の修行そのものに重きを置く精神性を尊ぶ風潮があります。このため前者が受け入れやすいのだと思います。私自身のことを考えても、若い頃そのような指導受け、少年サッカーに携わった後も何の疑いもなく「選ばれて出場する人」を育てることばかり考えていた時期があったように思います。みなさんの中にも、私と同じような思いの方もおいでなのではないでしょうか。

少年サッカー指導者が育てているのは「選手」なのか「プレーヤー」なのか。若い友人と話していて、私なりに思ったことは、少年の時期こそ「プレーする人」を育てるという視点をさらに模索すべきだろうということでした。なぜかというと、日本のスポーツ指導の歴史を考えると、前者は何もしなくても当たり前に根強く残るでしょうが、後者は意図的にそうしようと思わなければそうなりにくいからです。

各クラブにおかれましても、指導者の打ち合わせ等でぜひ話題にいただければと思います。

「委員長通信」へのご意見ご質問は、FAXにて、四種委員会事務局までお願いいたします。 FAX 047-324-3207